

お告げのマリア修道会

まごころ会

2024年9月

Tel.095-846-8300



QRコードから
アクセスして
下さい

『わたしは主のはしたためです。
お言葉どおり、この身になりますように。』

ド・ロ様と歩くミュージアム

「山の修道院」がオープンしました

昨年、9月末にプレオープンしていた大平作業所跡に加え、「山の修道院」の簡易宿泊所の許可が下り、キャンプサイトと一緒に宿泊所、イベント会場として利用していただけるようになりました。山の修道院は、自然の素材(木材・石)で作られ、窓もたくさんあり、開放的で温かい空間になっています。

1階に調理スペースがあり、自分達で料理ができます。キャンプサイトには、かまどがありますので、薪を拾って火を眺めながら料理をすることもできます。薪で炊いたご飯は格別の味がすると思います。2階は窓際に、はめ込み式の細長い机があるだけの広い空間なのでどんな風に使うかはアイデア次第です。

便利さはありませんが、自然に囲まれた空間で、ド・ロ様と同じ空気を吸ってみませんか。ISHIZUEのホームページで予約できます。

9月1日から10月4日は「いのちを守るための月間」です。毎年、9月の第一日曜日は「被造物を大切に作る世界祈願日」で、今年のフランシスコ教皇のメッセージは「被造物とともにあって、希望し行動しよう」です。



窓から見える温かい灯り
階段昇降時にも海や山が
窓いっぱい広がります。



今回、いちから積んだド・ロ壁。職人さんによると石自らが、「私の場所はこちらですと教えてくれる」とのことです。



2階で寝袋を利用して休めます。朝日とともに気持ちよく目が覚めそうです。



キャンプサイトから海を眺めて水平線に沈んでいく夕陽をゆっくりと眺めながら、自然との語り、神様との語り導かれていきそうです。

まごころ会会員帰天、お祈りください

- ・マリア 平川 マツ様
- ・テレジア 梅田 ミサ様
- 三井楽教会
- 上神崎教会



「アート」で比日交流

子どもたちに美術ワークショップ

マラテ地区のアライ・カプア

首都圏マニラ市マラテ地区のカトリック布教に基づき共同体「アライ・カプア」で4日、日本人による粘土を使用した子ども向け美術ワークショップが行われた。開始時間の午前10時半前には、アライ・カプアの運営をボランティアスタッフとして手伝う地区の母親3人が調理したビーフン（フィリピン風焼きそば）が振舞われ、子どもたち約50人が数グループに分かれてお祈りをし、食事を堪能した。

ワークショップを実施したのは、東京で32年間小学校教師を務め、退職後も目黒区の公立や、私立の小学校で非常勤講師として図画工作を教える楚良浄（そら・じょう）さん（62）。千葉の短期大学の子ども教育学科で



日本から持参した粘土で美術ワークショップを行う楚良浄さん（中央）とボランティアのシスター梅木久美さん（右奥） 4日午前、首都圏マニラ市マラテ地区で岡田薫撮影

も教鞭（べん）をとる。アライ・カプア訪問は新型コロナウイルスをはさんで5回目だが、フィリピンを訪れたのは7回目で、初回はマルコス元大統領が敷いた戒厳令下の1979年。楚良さんが18歳の時だった。当時バギオ市で戦後に日系人の救済に尽力していた日本人カトリックシスターの海野常世さん（故人）と会う機会にも恵まれた。

東京出身の楚良さんは、大田区にある修道院が管轄の養護施設で長年ボランティア活動を続けてきた縁で、比との関係が深い同修道院のシスター白石に同行して2017年にアライ・カプアを訪問。それが年一回のワークショップ継続のきっかけとなった。この日のワークショップに参加したのは、周辺の複数パラングイ（最小行政区）に住む小学校の中高学年15人。楚良さんとの会話は英語が中心で、子どもたちの理解が及ばない場面では、スタッフの一人がフィリピン語で通訳した。子どもたちは楚良さんが日本から持参した粘土をこねて感触を確かめ、グループごとに絵具

でお告げのマリア修道会シスターの梅木久美さん（52）だ。前職の高齢者福祉施設を退き、同協会長の要請で昨年5月から2週間ほどの比滞在を約2カ月おきに続けてきた。今回は5月半ば〜8月半ばまでの長期滞在であり、子どもたちとのコミュニケーション促進のために教科書を使ってフィリピン語の勉強を続ける。また、日に3度、フィリピン料理を含めて自炊、移動には電車やジプニー、トライシクルも使い、庶民の暮らしを実践している。「現在『アライ・カプア友の会』の日本での組織化に向けて動いており、少しでも多くの人にアライ・カプアを知っていただけたら」と思いを込めた。

孫娘を連れていた会計係のベロニカ・ガディさん（65）によると、アライ・カプアはシスターのクリスティン・タン氏によって1979年に設立。シスター・タンは2003年に亡くなったが、生前に東京大田区のシスター白石と深い親交を結んでいたことから、日本の修道会との連携が続いてきた。

「日本の子どもたちに『公立学校や私立学校の子どもたちに見てもらうのが私の役割』という楚良さん。ワークショップで子どもたちが好奇心そのままに楽しむ様子を録画していた。終了後、『造形を通じてコミュニケーション』がはかどり、いつも日本でやっている授業と似てくる。これがアートの素晴らしさだと思う」と楚良さん。ワークショップに参加していた小学4年生のユアン・ダランティナウさん（10）は、粘土に色を付けるという「新しいこと」を学べて楽しかった。小学5年生のデニス・カベルトさん（10）も、「自由なものを作れたことが楽しかった」そうで、「これまで知らなかったことを教えてくれてありがとう」と楚良さんへの感謝を口にした。

▽日本との強い絆
現在アライ・カプアにはボランティアで参加している日本人シスターがいる。長崎出身で同地の

▽日本との強い絆
現在アライ・カプアにはボランティアで参加している日本人シスターがいる。長崎出身で同地の

フィリピンで発行されている日本人向けの「日刊まにら新聞」（8月9日）でアライ・カプアでの活動の1コマが紹介されました。記事を書いた岡田さんは当日、朝早くからアライ・カプアの事務所に来られて、給食サービスの様子を見、ビールを食べて、子どもたちと交流してくれました。